みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

5.広報・社会連携

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005951

5 広報・社会連携

概観

学校教育・社会教育活動

本館創設40周年を迎え、本館が長年培った研究成果を幅広い層に社会還元するため、積極的に博物館の外へ打って出る活動を行った。主に社会人を対象とした生涯教育として、大阪梅田のグランフロント大阪において、特別展「イメージの力」関連イベントである連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」を6回シリーズで開催した。大阪阿倍野のあべのハルカス近鉄本店においては、連続講座「カレッジシアター地球探究紀行」（産経新聞主催。36回開催）に特別協力した。また、園田学園女子大学総合生涯学習センターとの連携講座（6回開催中の5回）及びNPO法人大阪府高齢者大学校の講座・世界の文化に親しむ科（30回開催）において、引き続き本館教員が講座を担当した。

その他に、大学教育の発展に向けて、千里文化財団の協力のもと、「国立民族学博物館キャンパスメンバーズ」を継続し、高等教育への活用を推進した。26年度は、新たに学校法人立命館（立命館大学・立命館高等学校・立命館宇治高等学校・立命館守山高等学校・立命館慶祥高等学校）を加え、継続申し込み4件（大阪大学、京都文教学園、同志社大学文化情報学部文化情報学研究科、千里金蘭大学）と合わせて、1,049人の学生、教職員が来館した。また、本館を大学教育に広く活用するためのマニュアル「大学のためのみんぱく活用マニュアル」の配布を継続し、81件、2,573名の大学関係者が展示場を利用した。

初等・中等教育への貢献としては、近隣の教育委員会と連携して、大阪北摂地域の中学校6校14名を職場体験として受け入れた。さらに、小・中学校の教諭を対象に、博物館を活用した遠足や校外学習のためのガイダンスを2回実施し、48団体137名の参加があった。

インターネットによる広報活動

情報通信技術（ICT）の進化及び国際化の進展を受けて、インターネットによるアクセシビリティを一段と向上させた。

ホームページに関しては、スマートフォンやタブレット端末からのアクセスが増加しており、その利便性を高めるため、ホームページのユーザインタフェースをスマートフォン用に最適化した。また、昨年度試験的に実施し、好評だったペーパーレスのスマートフォン用観覧券を本格導入し、通年で購入できるようにした。さらに、言語による障壁を越えて、国際的な情報発信力を高めるため、英語に加えて、アラビア語、中国語（簡体字・繁体字）、フランス語、ロシア語、スペイン語、韓国語の多言語による本館紹介文を新たに掲載するなど改良を施し、ホームページの利用者は着実に増加した。（訪問者数 809,641、ページビュー数 2,613,790）。

メールマガジン（みんぱく e-news）に関しては、利用者アンケートの結果等を参考に内容の見直しを図りながら、毎月1回継続して発信している（配信数は56,951件）。

ソーシャルメディアに関しては、若者層を中心として、ホームページを補完する気軽で双方向的なメディアとして、昨年度の開始以来順調に浸透している（Facebook いいね！数 4,708、Twitter フォロワー数 8,098、YouTube 総再生回数 8,093回）。特に、特別展「イメージの力」に合わせて実施したTwitterキャンペーンでは、期間中に展覧会に関するツイートを集め、展覧会の話題を拡散し、交流してもらうとともに、観覧者の生の声を聞く貴重な機会ともなった。

マスメディアによる広報活動

特別展「イメージの力」の関連イベントとして、MBS（毎日放送）元アナウンサーでパーソナリティの角 淳一氏と吉田憲司・本館教授（特別展実行委員長）によるトークイベント「みんぱく×MBSラジオ presents　角 淳一が迫る！すみからすみまでイメージの力」を開催した（参加者数 450名）。本イベントは、ラジオ番組及びテレビ番組で紹介された他、関連してラジオ番組の生放送に教員が出演したり、特別展や連続講座のラジオCMを流したりして、マスメディアの発信力を利用し、本館に興味を持つ層の裾野を広げた。

毎日新聞の「旅・いろいろ地球人」や毎日小学生新聞の「みんぱく世界の旅」の連載を継続し、教員がそれぞれの研究内容を読者向けにわかりやすく解説した。千里ニュータウンFM放送番組「ごきげん千里837（やぁ、みんな）」も継続している。

プレスリリースを強化し、新たに公開講演会や研究公演、夏休み向け等のリリースを発信した（年間27本）。報道関係者との懇談会も年12回（うち内覧会5回。参加者数 116名）開催し、共同研究をはじめとする最新の研究成果を積極的に紹介した。

研究成果の社会還元及び教育普及活動

継続して、「みんぱくゼミナール」を12回（参加者数 2,631名）、「みんぱく映画会」（みんぱくワールドシネマ含む）を10回（参加者数 3,241名）、「研究公演」を４回（参加者数 1,776名）、「みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう」を39回実施した（参加者数 1,485名）。

特に、展示関連では、新構築した朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化「沖縄のくらし」「多みんぞくニホン」展示を広く社会へ紹介するため「みんぱくフォーラム2014　東アジア展示があたらしくなりました!!」と題して、研究公演や展示場クイズ「みんぱQ」等を実施した。また、特別展「イメージの力」の関心を高めるため、トークイベント「イメージの力」を３回開催し、クリエイティブな分野で活躍する歌手のUA氏、デザイナーの三木 健氏、小説家のいしいしんじ氏の３名のゲストを招いた（総参加者数 457名）。

機関研究関連では、「包摂と自律の人間学」のテーマに沿って、上映会「みんぱくワールドシネマ」を開催した。これらの活動は、広報誌『月刊みんぱく』を国立民族学博物館友の会会員に配付したり、全国の研究機関、大学等に寄贈したりすることを通じて、広く情報発信した。視覚障がい者向けの音訳版も並行して製作・配付した。

地域に根ざした広報活動

北大阪７市３町の美術館・博物館計50館による文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」に参加及び会場提供した。また、吹田市主催の「ぐるっとすいた」事業に協力し、吹田市の小中学生を対象としたスタンプラリーのポイントとなった。他にもミュージアムぐるっとパス・関西2014に継続参加するなど、地域における美術館・博物館の活動における中心的役割を担い、地元に向けた広報活動を展開した。

その他の新しい広報活動

広報予算をかけず、新規ファン層を開拓するために次に挙げる新しい取り組みを進めた。1）自動販売機飲料販売大手のジャパン・ビバレッジとコラボレーションし、飲料カップ約100万個に本館展示にまつわるクイズを提供した。2）企画展「みんぱくおもちゃ博覧会」の開催に合わせて、玩具に関連の深い大阪府立大型児童館ビッグバン（大阪府堺市）と日本玩具博物館（兵庫県姫路市）とそれぞれ観覧料の相互割引を実施した。3）JAF（日本自動車連盟）とe-kenetカード（京阪カード）会員向けに観覧料の優待制度を導入した。4）前述の連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」の参加者に特別展割引券を配付した。

最後に、昨年度の広報の課題として挙げた広報戦略の策定については、広報企画会議において国際、国内、地域毎に適した広報手段を用いるという方針が共通認識された。従来、一般の方に伝えやすく、関心の高い展示や催しの広報に重点をおいてきたが、研究広報の比重を上げていくことによって、研究機関としての姿をより効果的に発信していくことが今後の課題として挙げられる。

国立民族学博物館要覧2014

・和文要覧 2014年６月発行
・英文要覧 2014年12月発行

ホームページ　http://www.minpaku.ac.jp/　（2015年３月31日現在）

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育の他、刊行物、文献図書資料、標本資料等あらゆる情報を、インターネットを介して世界に発信するためにホームページを作成している。

提供している主な情報は以下の通り。2014年度の訪問件数は809,641件。

・研究活動

研究部スタッフの研究活動や業績、本館が推進する研究プロジェクトや共同研究およびシンポジウム、研究出版物などの情報。

・博物館展示・事業活動

本館展示・企画展示・特別展示などの展示紹介、学術講演会・ゼミナール・研究公演・映画会などのイベント案内、博物館の利用案内、国立民族学博物館友の会などの情報。

・大学院教育

総合研究大学院大学の専攻概要、授業と研究指導、在学生の研究内容等および特別共同利用研究員制度などの

情報。

・データベース

本館が所蔵する文献図書資料、標本資料、マルチメディア情報などのデータベース。

また、「みんぱく e-news」を発行し、毎月開催している「みんぱくゼミナール」、随時行われる「シンポジウム／フォーラム」「研究公演」「みんぱく映画会」「特別展」などのお知らせを、月１回電子メールで配信している。2014年度の配信数は56,951部。

報道

●報道関係者との懇談会

2014年４月17日	８名（７社）	企画展「みんぱくおもちゃ博覧会――大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」、台湾映画鑑賞会「台湾映画鑑賞会　映画から台湾を知る」、みんぱく映画会「マイネームイズハーン」、国際フォーラム「世界の博物館2014」ほか
５月15日	14名（11社）	企画展「みんぱくおもちゃ博覧会――大阪府指定有形民俗文化財『時代玩具コレクション』」展示ツアー、音楽の祭日2014 in みんぱく、公開フォーラム ユネスコ無形文化遺産登録記念「和食は誰のものか？」ほか
６月19日	７名（６社）	創設40周年「世界民族百科事典」、研究公演「アリラン峠を越えていく――在日コリアン音楽の今」、みんぱく映画会「かぞくのくに」、博学連携教員研修ワークショップ2014 in みんぱく「学校と博物館でつくる 国際理解教育――センセイもつくる・あそぶ・たのしむ」ほか
７月17日	７名（６社）	企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」、特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」、ワールドシネマ「ヒア・アンド・ゼア」、連続講座「台湾文化を知る」、お知らせ「ジョージ・ブラウン・コレクション・データベース公開」ほか
９月４日	12名（８社）	企画展「未知なる大地 グリーンランドの自然と文化」式典・展示ツアー、みんぱく×MBSイベント「すみからすみまでイメージの力」、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」、研究公演「りんけんバンドみんぱく公演」、シンポジウム「南アフリカの過去と現在――ネルソン・マンデラから続く道」ほか
９月10日	15名（11社）	特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」報道・出版関係者向け内覧会
10月16日	10名（８社）	年末年始展示イベント「ひつじ」、公開フォーラム「文化遺産の人類学」、北大阪ミュージアムメッセ、カムイノミ、公開フォーラム「学校芸能の現在（いま）、公開講演会「フィリップ・デスコラ博士研究講演会　イメージの人類学」ほか
11月20日	10名（６社）	国際シンポジウム「世界の食文化研究と博物館」、国際ワークショップ「人の移動と民族的地域的共同性の再構築」、公開シンポジウム「マヤ語からみた言語と思考と脳」、公開シンポジウム「文化財を伝える」、ほか
12月18日	８名（６社）	研究公演「じゃんがら念仏踊りみんぱく公演」、公開フォーラム「古代文明の生成過程――エジプトとアンデス」、国際フォーラム「中国地域の文化遺産――人類学の視点から」、年末年始展示イベント「ひつじ」展示ツアーほか
2015年１月15日	７名（６社）	新展示「南アジア・東南アジア展示」、国際フォーラム「紛争地の文化遺産と博物館」、研究フォーラム「持続可能なIPMに向けて――博物館環境データの分析手法を考える」、国際シンポジウム「アジアにおける新しい博物館・博物館学の展望」ほか
２月19日	９名（７社）	公開講演会「いやしの旅のウラ？表？――現代アジアツーリズム考」、国際ワークショップ「民族学資料の展示への利用とソースコミュニティとの協力関係」、研究フォーラム「世界文化遺産「ナスカの地上絵」の研究と保護

		をめぐる国際協力」ほか
3月19日	9名（7社）	研究公演「ネパールのネワール仏教舞踊チャルヤー研究公演・ワークショップ」、新展示「南アジア・東南アジア」式典・展示ツアー

●新聞等報道件数

2014年度は、テレビ15件、ミニコミ184件、ラジオ74件、雑誌58件、新聞662件、他98件、計1,091件の報道があった。

月刊みんぱく

4月号	（第439号）	2014年4月1日発行	特集「穴だけじゃない考古学」
5月号	（第440号）	2014年5月1日発行	特集「中国地域の文化――その多様性と伝統の展開」
6月号	（第441号）	2014年6月1日発行	特集「朝鮮半島の文化」
7月号	（第442号）	2014年7月1日発行	特集「沖縄のくらし」
8月号	（第443号）	2014年8月1日発行	特集「多みんぞくニホン」
9月号	（第444号）	2014年9月1日発行	特集「コラボの力」
10月号	（第445号）	2014年10月1日発行	特集「未知なる大地　グリーンランド」
11月号	（第446号）	2014年11月1日発行	特集「疫病」
12月号	（第447号）	2014年12月1日発行	特集「おもちゃいまむかし」
1月号	（第448号）	2015年1月1日発行	特集「ひつじ」
2月号	（第449号）	2015年2月1日発行	特集「地球人が宇宙人になるとき」
3月号	（第450号）	2015年3月1日発行	特集「益虫 害虫」

みんぱくゼミナール

第431回　世界の華僑・華人と“故郷”【新展示（中国地域の文化）関連】

2014年4月19日

講　師　陳　天璽（早稲田大学准教授／国立民族学博物館特別客員教員）

受講者　246名

内　容　中国国外に居住する中国系は華僑・華人と呼ばれており、4000万人以上いるとみられている。世界に根を下ろしながらも中国の伝統文化を守り続けている人びともいれば、異民族との通婚や世代交代により独特な複合文化を形成している人びともいる。そんな彼らの多彩な日常生活から、“故郷”とのかかわりについてみていった。

第432回　多みんぞくニホンのいま――特別展から10年【新展示（日本の文化「多みんぞくニホン」）関連】

2014年5月17日

講　師　庄司博史

受講者　228名

内　容　2004年3月特別展「多みんぞくニホン」がみんぱくで開催された。外国人の急増により単一民族社会といわれた日本の大きな変化を予兆する展示であった。10年後の今年3月、本館展示に「多みんぞくニホン」のコーナーが設けられた。この間、経済不況、東日本大震災など多くの試練をへて日本は外国人にとってどのように変化したのか考えた。

第433回　現在進行形の海外移民――韓国を去りゆく人びとの胸のうち【新展示（朝鮮半島の文化）関連】

2014年6月21日

講　師　太田心平

受講者　247名

内　容　朝鮮半島の外に暮らすコリアンは、いまや750万人以上。しかし、韓国において移民という行為は、けっして昔の話などではない。今日でも、毎年、人口の0.3%以上もの人びとが、外国へと移民していく。人びとはどうして韓国を去ろうとするのか、近年の調査研究をもとにお話しした。

第434回　泡盛今昔物語【新展示（日本の文化「沖縄のくらし」）関連】

2014年７月19日

講　師　日髙真吾、萩尾俊章（沖縄県教育庁文化財課副参事兼班長）

受講者　221名

内　容　泡盛は琉球王府の管理の下、首里の指定酒屋で生産されていた蒸留酒。かつて首里城には数百年ものの古酒が伝わり、外交や接待の際に振る舞われた。18世紀前半には一般にも広まりをみせ、今も人気を博している。ここでは、泡盛の今昔を紹介しながら、沖縄の歴史に触れた。

第435回　世界遺産に住む――中国・客家の伝統家屋【新展示（中国地域の文化）関連】

2014年８月16日

講　師　河合洋尚

受講者　207名

内　容　客家の人々は巨大な集合住宅に住んでいることで知られている。なかでもドーナツ型の円形土楼と馬蹄型の囲龍屋は珍しいため、文化遺産保護の対象にもなっている。本ゼミナールでは、円形土楼と囲龍屋をめぐる最新の情報を紹介した。

第436回　イメージの力――みんぱくのコレクションが語るもの【特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連】

2014年９月20日

講　師　吉田憲司

受講者　290名

内　容　人類はその歴史のなかできわめて多様なイメージを生み出してきた。果たしてそうしたイメージの創りあげ方や受けとり方に人類に共通の普遍性があるのだろうか。国立新美術館での展示を経て、みんぱくで改めて開催される特別展「イメージの力」のなかに、その答えをさぐった。

第437回　はるかなる北の大地、グリーンランドの自然と人びとの暮らし【企画展「未知なる大地――グリーンランドの自然と文化」関連】

2014年10月18日

講　師　岸上伸啓

受講者　240名

内　容　大西洋の北西部にあるグリーンランドは、世界最大の島である。総面積は日本の約６倍ですが、その80％は厚い氷床に覆われている。そこには約57,000人のイヌイット人やデンマーク人がくらしている。グリーンランドの大自然の姿、そこに住む人びとの歴史と現状について紹介した。

第438回　美術館からみたみんぱくコレクション【特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連】

2014年11月15日

講　師　長屋光枝（国立新美術館主任研究員）、山田由佳子（国立新美術館研究員）、齋藤玲子、司会：上羽陽子

受講者　223名

内　容　2014年２月から６月まで国立新美術館で企画展「イメージの力」が開催された。新美術館とみんぱくのコラボレーションによる資料選定から公開までの共同作業を振り返り、異なったふたつの領域である美術館と博物館での展示を、新美術館の研究員とともにお話しした。

第439回　グローバル化の中の財団

2014年12月20日

講　師　出口正之

受講者　126名

内　容　“財団”というものは、聞いたことがあるようで、なかなかイメージがつかみにくいものだ。海外でいうと、ハーバード大学もニューヨーク自然史博物館も財団である。スポーツ団体からロックフェラー財団まで、現在の財団にまつわる話を紹介した。

第440回　デジタルアーカイブズの楽しみ――文化遺産オンラインから実業史錦絵絵引まで
2015年1月17日
講　師　丸川雄三
受講者　170名
内　容　情報技術の進展にともない、文化財を取り巻く高精細画像や電子書籍などのデジタルアーカイブを活用した情報発信が広がりを見せている。2004年に一般公開され、その先駆けとなった「文化遺産オンライン」をはじめ、民俗研究資料を高精細画像や解説とともに閲覧できる「実業史錦絵絵引」などのウェブサービスを紹介した。

第441回　遊牧の起源――バングラデシュの豚と人のかかわり
2015年2月21日
講　師　池谷和信
受講者　241名
内　容　遊牧は、モンゴルや西アジアや東アフリカなどの乾燥帯を中心にみられる人類の生活様式の一つであり、その起源が議論されてきた。しかし、ここでは、ガンジス川下流部のベンガルデルタにおける湿潤帯の豚遊牧の実際を紹介することから、その起源に関する新たな説を提示した。

第442回　ミシンと家庭――100年前のグローバル商品
2015年3月21日
講　師　森　明子
受講者　192名
内　容　ミシンは、1900年ころ一般への販売がはじまり、まもなくシンガー社の製品が世界の市場を席巻するグローバル商品になった。世界中が産業化に邁進していった時代、家庭にはいったミシンとともに、各国で「消費者」の姿があらわれてくる。ここでは、ヨーロッパと日本について、お話しした。

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

第339回　2015年4月6日　徳宏タイ族の音文化――音で対話する楽器と織機
講　　師　伊藤　悟（外来研究員）
参加人数　43人
内　　容　かつて中国雲南省徳宏州のタイ族村落では、夜になると男性が女性の家の前で楽器を奏で、その音色にこたえて女性が機織りの音を響かせたという。この不思議な音によるコミュニケーションのしくみと楽器や織機の現状について、楽器の実演もまじえて紹介した。

第340回　2015年4月13日　外国人集住地域って？
講　　師　庄司博史
参加人数　51人
内　　容　日本各地には世界各国からの外国人が集住する町がある。幕末の外国人居留地に由来する横浜中華街もあれば、北関東や東海地方には近年南米出身者が集住し始めた町もあり、誕生した時代や背景は多様である。なぜ彼らは集まり、どのように暮らしているのか考えてみた。

第341回　2015年4月20日　台湾原住民族の工芸文化――むかし、今、そして未来
講　　師　野林厚志
参加人数　41人
内　　容　みんぱくには、日本統治時代に収集された台湾原住民族に関する道具や衣服が収蔵されている。これらは学術資料として研究に活用されるだけでなく、祖先の営みを伝え、今を生きる原住民族自身の工芸文化を創りだすうえで重要な役割を果たす文化資源として注目されている。

第342回　2015年４月27日　マヤ文字で名前を書いてみよう
講　　師　八杉佳穂
参加人数　48人
内　　容　マヤ文字は解読途中の文字である。マヤ文明の概説のあと、解読の方法をしめして、文字について説明した。マヤ文字は漢字仮名交じり表記法とよく似ているので、五十音図にならって作った百音図の音節文字を利用して名前を書いてみた。

第343回　2015年５月４日　ベトナム、黒タイのディエンビエンフ――60年
講　　師　樫永真佐夫
参加人数　46人
内　　容　ディエンビエンフーの戦いの終結が1954年５月７日。ベトナムはまもなく独立60周年を迎える。黒タイがひじょうに古くに入植し開拓した当地は、神話の宝庫でもある。黒タイの人々にとってのディエンビエンフーを、この60年の社会経済状況も含め、お話しした。

第344回　2015年５月11日　雲南省におけるキリスト教の展開
講　　師　横山廣子
参加人数　43人
内　　容　近代の西欧による宣教活動で、中国雲南省の少数民族の一部は集団的にキリスト教に改宗した。民族元来の歌や踊りの伝統とも融合し、宗教と結びついた音楽芸能が盛んで、最近、海外公演を果たした人びともいる。その信仰の歴史と、教会堂の落成式典での歌や踊りを動画を交えてご紹介した。

第345回　2015年５月18日　在留ネパール人の現在
講　　師　南 真木人
参加人数　38人
内　　容　日本に暮らすネパール人は約２万７千人で、在留インド人の数を上まわっている。新来のインド人がIT技術者であることは知られているが、ネパール人はどのように生活しているのであろうか。「多みんぞくニホン」の一翼を担うネパール人の現在を紹介した。

第346回　2015年５月25日　インド映画の新時代
講　　師　杉本良男
参加人数　28人
内　　容　21世紀に入って、グローバル化とディジタル化がますます加速する中で、インド映画は大きな変貌をとげている。ボリウッド映画が世界市場に進出するとともに、地方映画も独自の市場を開拓している。ここでは新時代に入ったインド映画の現状についてお話しした。

第347回　2015年６月１日　華僑の移住と暮らし――ベトナム
講　　師　河合洋尚
参加人数　25人
内　　容　ベトナムの華僑は、第二世界大戦、ベトナム戦争、華人排斥運動を受け、苦難の歴史を経験してきた。彼らの多くは移民・難民としてベトナムを離れ、一部の者は国民としてベトナムで暮らしている。ベトナム華僑の現在を紹介した。

第348回　2015年６月15日　韓国文化の変わった点と変わらない点
講　　師　太田心平
参加人数　42人
内　　容　時代劇にみるような朝鮮半島の文化と、現代のヒップでポップな韓国文化。このあいだには、変わった点だけではなく、実は変わらない点もある。新しくなったみんぱくの展示をヒントに、何がどう変わったか、何がなぜ変わらなかったのかを、一緒に考えた。

第349回　2015年６月29日　時代玩具コレクションから見る日本の世相史
講　　師　日髙真吾
参加人数　29人
内　　容　５月15日より開催した企画展「みんぱくおもちゃ博覧会」では、ブリキ玩具、マスコミ玩具、ボード玩具、カード玩具の４つのコーナーから大阪府指定有形文化財「時代玩具コレクション」の一部を紹介した。今回は、本展示の内容について紹介しながら、近現代の日本の世相について概観した。

第350回　2015年７月６日　多みんぞくの街・新宿新大久保物語――生まれ育った者の視点から
講　　師　菅瀬晶子
参加人数　45人
内　　容　日本有数の多みんぞくの街として知られる、東京・新宿の新大久保。コリアンタウンとして知られているが、最近はムスリムを対象としたハラール・フード専門店が増え、多様化している。この街がいかにして多みんぞくの街となったのか、その歴史的背景から今日の様子までを、出身者の視点からお話しした。

第351回　2015年７月13日　アフリカの布から見る世界の経済
講　　師　三島禎子
参加人数　57人
内　　容　斬新な色彩と柄が印象的なアフリカのプリント布はどこで作られ、どのように市場に運ばれてくるのであろうか。布の文化的価値と経済的価値の変遷をたどりながら、古来、交易に従事してきた商人の今日におけるビジネスを紹介した。

第352回　2015年７月27日　うどん・オムライス・味の素――朝鮮半島における「食」の近代化
講　　師　朝倉敏夫
参加人数　45人
内　　容　韓国では今でも、ウドン、オムライス、アジノモトなど、植民地期に渡った日本の「食」の言葉が使われている。そうした「食」の現在と、1925年から1939年にかけて味の素が『東亜日報』に掲載した広告から、当時の朝鮮半島における「食」の事情を探った。

第353回　2015年８月３日　心的イメージとは何か――イメージ・メディア論
講　　師　久保正敏
参加人数　35人
内　　容　特別展「イメージの力」に関連して、イメージの働きを考えた。認知心理学では、外界から入る「知覚イメージ」と、脳内で作られる「記憶イメージ」や「想像イメージ」が、脳内の共用キャンバスに描かれると説明される。人間の豊かなイメージ活動の源は、この仕組みにあるのかも知れない。

第354回　2015年８月24日　みんぱくシンボルマークをえがく
講　　師　山本泰則
参加人数　13人
内　　容　みんぱく創設40周年にあたり、「みんぱくシンボルマーク」を話題にした。このマークは一見単純そうな形に見えるが、実際にえがいてみると思わぬ発見がある。今回はそんなエピソードや、創設当時のマークの原版、リニューアルしたマークの図面、色見本を紹介しながら、さまざまな角度からみんぱくシンボルマークを掘りさげてみた。

第355回　2015年８月31日　完成した『日本の文化』展示
講　　師　日髙真吾
参加人数　18人
内　　容　日本の文化展示場は２年間をかけて、新しく生まれ変わった。今回は、これまでの展示を活かしつつ、祭りと芸能、日々のくらし、沖縄のくらし、多みんぞくニホンという構成になっている。ここでは、新しい日本の文化展示場について解説した。

第356回　2015年９月７日　グリーンランドの自然と文化

講　　師　岸上伸啓

参加人数　50人

内　　容　グリーンランドは北アメリカ大陸の北東沖にある世界最大の島である。その大半は氷河に覆われている氷の島だが、名称は「緑の大地」である。なぜ、そのような名前がついたのか、同島における気候変動と文化の変化について紹介した。

第357回　2015年９月28日　絵解きの時

講　　師　山中由里子

参加人数　48人

内　　容　人類は移りゆく「時間」をどのようにとらえ、表してきたのか？ 過去から未来へと直線的に時間が流れているという感覚は、人類共通のものなのか？ 特別展「イメージの力」に展示されている神話や物語をかたどったモノには、さまざまな時のかたちがみてとれる。

第358回　2015年10月５日　ヒンドゥー教世界の神々のイメージ

講　　師　三尾　稔

参加人数　50人

内　　容　ヒンドゥー教の世界では、神々はさまざまなかたちを通じて人間の世界に姿を現し、人間と交渉をする。人間が神の姿を描いたり、かたどったりするのではなく、神が自ずから姿を現す。特別展の展示品を中心に、さまざまな事例を通じて、ヒンドゥー教世界の神と人の関係を考えた。

第359回　2015年10月19日　死者を送る――ニューギニアの彫刻と儀礼

講　　師　林　勲男

参加人数　36人

内　　容　南太平洋のニューアイルランド島とニューギニア島には、西洋の収集家やミュージアムによって早くから注目されてきた彫刻がある。前者はマランガン、後者はビスと呼ばれる。これら２つの彫刻が製作される背景と歴史的な変遷について辿ってみた。

第360回　2015年10月26日　消費されるイメージ――観光みやげか博物館資料か

講　　師　齋藤玲子

参加人数　41人

内　　容　観光客向けにつくられた物は、「伝統的」でなく「真正」ではないとされ、かつては博物館の収集対象とはみなされなかった。しかし、今では商品化された物も時代を映すものととらえられるようになっている。特別展の展示品を例に、みやげについて考えた。

第361回　2015年11月２日　沖縄音楽を育む人びと

講　　師　呉屋淳子

参加人数　49人

内　　容　沖縄音楽は、日本国内外で知られるようになった。特に、念仏踊りを起源とするエイサーは、現代の若者を魅了しながら独特な世界を創り上げている。沖縄音楽が広がった背景について、沖縄音楽を育む人びとに注目しながら紹介した。

第362回　2015年11月23日　民族資料と芸術作品のあいだ

講　　師　須藤健一

参加人数　71人

内　　容　みんぱくは、34万点の世界各地の民族資料を収集・所蔵している。ピカソやモデリアーニが作品のヒントを得たのと同種の仮面が「イメージの力」展に出ている。なぜ、アフリカの仮面は「民族資料」、それを真似た絵画は「芸術作品」と呼ばれるのかを考えた。

第363回　2015年11月30日　デジタルビューアで楽しむ「イメージの力」
講　　師　丸川雄三
参加人数　25人
内　　容　特別展「イメージの力」に展示されている資料や作品を、画像とともに閲覧できるデジタルビューアを紹介した。展示にはない研究者による資料の解説を読むこともでき、国立民族学博物館のコレクションの幅広さと奥深さを、展示とあわせてご堪能いただいた。

第364回　2015年12月７日　邪視をはねかえす力
講　　師　上羽陽子
参加人数　70人
内　　容　邪視とはまなざしや視線に宿る力が災いをもたらすという信仰である。このような力は嫉妬や妬みが起因とされている。インド西部の刺繍布や紐、傷痕などの事例を紹介しながら、邪視信仰にたいして、人びとがどのように関わってきたのか考えてみた。

第365回　2015年12月14日　男の世界と女の世界――沖縄離島社会の現在
講　　師　加賀谷真梨（機関研究員）
参加人数　18人
内　　容　沖縄には、男女が異なる役割を担い、男の世界と女の世界が明確に区分されてきた地域がある。しかし、少子高齢化や移住者の増加によって、そうした社会にゆらぎが生じている。サロンでは２つの離島を事例にその実態と今後の展望についてお話しした。

第366回　2015年12月21日　エボラ出血熱と「文化」
講　　師　浜田明範（機関研究員）
参加人数　23人
内　　容　西アフリカにおけるエボラ出血熱の流行。その原因は当該地域の文化にあるという論調が目立っているが、それは本当に正しいのか？ 今回は、別の説明を試みることで、私たち自身に突き付けられている課題を明らかにした。

第367回　2015年１月11日　ドイツのクリスマス・ピラミッド
講　　師　森　明子
参加人数　40人
内　　容　ドイツの北東部では、針葉樹のツリーではなく、クリスマス・ピラミッドと呼ばれる木彫作品を飾る。古い地方文化を伝えるもので、すばらしい木彫の技術が生かされている。ベルリンのコレクターから寄贈されたばかりの、新着資料について説明した。

第368回　2015年１月18日　北方の織布と織機
講　　師　佐々木史郎
参加人数　31人
内　　容　シベリア、極東ロシアのような寒冷地でも布を織る文化を持つ人々がいた。彼らはどのような織機で、どのような布を作っていたのか、それはどのように使用され、どのように機能したのかについてお話しした。

第369回　2015年１月25日　中央アジアの嫁入り道具
講　　師　藤本透子
参加人数　47人
内　　容　親が決めた相手と結婚する場合も、「駆け落ち」してから結婚を認めてもらう場合も、嫁入り道具は結婚後の暮らしを支える大切な財産となる。中央アジアの草原に暮らすカザフ人の嫁入り道具を紹介しながら、変わりゆく結婚のかたちについて考えた。

第370回　2015年２月１日　「エイジング・イン・プレイス」をめぐる議論と実践
講　　師　鈴木七美
参加人数　16人
内　　容　高齢期の住環境に注目して使われてきた「エイジング・イン・プレイス」という語は、「現在の環境に暮らし続ける」あるいは「お気に入りの場所を選択して暮らす」などを意味する。「エイジング・イン・プレイス」による生活環境のノーマライゼーションの展開を考えた。

第371回　2015年２月８日　モノから組織を考える――展示を見る一つの視点
講　　師　出口正之
参加人数　21人
内　　容　民博の研究者は、モノを集め展示し、モノから研究の対象である民族を考えている。しかし、モノと民族との間には非常に多くのものが介在している。例えば「組織」というものもその一つである。今回は「組織」を通じて民博の展示を見る視点を提供した。

第372回　2015年２月15日　インドネシア・バリ島の聖獣バロンと魔女ランダのいる暮らし――宗教儀礼から観光ショーまで
講　　師　吉田ゆか子
参加人数　70人
内　　容　インドネシア・バリ島のシンボルともいえる聖獣バロンと魔女ランダ。その仮面は、村でご神体として祀られるものもあれば、土産物となるもの、観光芸能ショーで用いられるものもある。バロンとランダを慕ったり、恐れたり、頼ったりするバリの人々の暮らしを紹介した。

第373回　2015年２月22日　音楽展示の楽しみ方
講　　師　寺田吉孝
参加人数　17人
内　　容　音楽展示は、モノとしての楽器の展示になる傾向がある。2010年３月に新しく生まれ変わった音楽展示では、楽器を軸としながらも、人間と音楽の関係を考えていただけるような展示を目指した。その取り組みと展示のハイライトを紹介した。

第374回　2015年３月１日　言語の調査とはどういうものか
講　　師　吉岡　乾
参加人数　27人
内　　容　フィールド言語学という分野では、人類学と同じように、現地へと赴いて調査をする。とはいえ、言語の調査ではいったい何をどう調べるのか。言語学の研究とは、具体的にどういうことをするのか。毎日触れている「言語」を、改めて考えてみた。

第375回　2015年３月８日　鶏からみた世界史――アジアの森から世界の台所へ
講　　師　池谷和信
参加人数　39人
内　　容　人類は、どのようにして野生の鶏を家禽の鶏に変えてきたのか。現在、鶏の肉や卵は世界中で食用にされ、一部の地域では闘鶏や儀礼の際に鶏が使われている。鶏がアジアの森で家禽化されたのちに、世界の台所に置かれるようになった過程を紹介した。

第376回　2015年３月22日　災害の記憶とコミュニティ
講　　師　竹沢尚一郎
参加人数　12人
内　　容　東日本大震災は多くの地域社会に深い爪痕を残した。過去に津波を経験した地域なのに、なぜこれほど被害が大きかったのか。記憶の継承が重要なことは承知しているが、どう継承していくかで議論が生じていた。民博で東日本大震災の展示を計画していることも踏まえてこの問題を考えた。

第377回　2015年３月29日　パプア・ニューギニアのタイムカプセル――ジョージ・ブラウン・コレクション

講　　師　Peter J. Matthews

参加人数　37人

内　　容　1970年代から80年代、民博は民族学的資料を世界の各地から直接収集し、また、すでに存在しているコレクションを購入し、収蔵品の拡充にとりくんだ。ジョージ・ブラウンは19世紀後半に太平洋の島々で宣教師としてはたらき、その間コレクションを大成した。その一部をオセアニア展示でご覧いただいた。

研究公演

「アリラン峠を越えていく――在日コリアン音楽の今」

2014年７月20日

解　説　髙　正子（神戸大学）、福岡正太

出　演　安　聖民、李　政美、金剛山歌劇団ほか

参加者　474名

内　容　アリラン峠は、在日コリアンにとって、峠の向こう側にあるかもしれない「希望」に向かい、越えなければならないさまざまな困難を象徴するものである。戦後、朝鮮半島は南北に分断され、在日コリアンコミュニティも分断された。くわえて、日本社会への同化の圧力により２世・３世たちは、アイデンティティの混乱にさらされることになった。１世の身体に深く染みついた民族文化は、朝鮮半島での生活体験のない２世・３世たちにとっては、それを学び身体化することで獲得するものである。こうして獲得された民族文化を通してコリアンとしてのアイデンティティを確認し、日本での生活体験を音楽に託して表現している。本公演では、このような在日コリアンたちが紡ぎだす「音楽の今」を五感で感じていただいた。

「伝統芸能パンソリによる韓国文化の理解」

2014年９月15日

解　説　朝倉敏夫

出　演　南　海星、安　聖民 ほか11名

参加者　495名

内　容　本研究公演は、2009年に引き続き、韓国の伝統芸能パンソリの舞台公演およびワークショップを通して韓国文化の理解を図ろうとしたものである。舞台公演では、パンソリの古典演目の中から『水宮歌』を取り上げた。パンソリはひとつの物語を完唱するのに数時間を要し、通しで演奏されることはなかなかない。またパンソリは一人語りを基本としながらも、現在ではオペラ形式で演奏されるなど多様化している。今回の公演では、様々な演奏形態を取り入れながら、南　海星先生とその弟子たちの歌声による『水宮歌』のストーリー全体を楽しむことのできる公演を開催した。ストーリー全体を鑑賞することにより、ソリ（唄）だけでなく、物語の魅力もお伝えした。ワークショップでは、南先生とその弟子たちによる実演を通して、“口伝”を伝承形態の基本とするパンソリが実際どのような形で師匠から弟子に伝えられるのかをご覧いただいた。たんなる公演では知りえないパンソリの世界を体験してもらい、参加者に「本物を実際に」学習していただく機会となった。

「りんけんバンドみんぱく公演」

2014年11月１日

解　説　日髙真吾、呉屋淳子

出　演　りんけんバンド、豊中市立庄内小学校児童

参加者　432名

内　容　沖縄の伝統芸能・エイサーは、現在、その躍動感ゆえに国内外の若者を魅了している。エイサーが全国に広がった背景には、沖縄の言葉とリズムにこだわった「りんけんバンド」の影響があるといわれている。みんぱくの本館展示「沖縄のくらし」では、このような現代へ受け継がれる沖縄音楽の姿も紹介している。本公演では、豊中市立庄内小学校の児童によるエイサー演舞とコラボしたステージをお見せした。

じゃんがら念仏踊りみんぱく公演

2015年１月24日

解　説　橋本裕之（追手門学院大学地域文化創造機構特別教授）、遠藤　諭（久之浜大久自安我楽念仏踊継承会）、日髙真吾

出　演　久之浜大久自安我楽（じゃんがら）念仏踊継承会

参加者　375名

内　容　国立民族学博物館では、東日本大震災で被災した芸能支援の一環として、毎年、館内で芸能を演じる「場」を設ける支援活動をすすめている。今年度公演した「じゃんがら」は、福島県に伝わる独特の念仏踊りである。本公演では、じゃんがらの披露のほか、復興に向けた人びとの思いについて語る座談会もおこなった。

みんぱく映画会

2014年４月29日

台湾映画鑑賞会――映画から台湾を知る①

「村と爆弾（原題：稲草人）」

担当講師　野林厚志

参 加 者　348名

内　　容　第二次世界大戦のさなか、台湾南部のあまり豊かとはいえない村で、アメリカ軍が落とした不発弾を村人が見つけた。村人は駐在の巡査とともに不発弾を街にはこび報償を得ようともくろむが、海上への投棄を命じられる。そして、意外な結末がおとずれる。日本の植民地であった台湾もまた第二次世界大戦を経験した。内地とよばれた日本に住む人たちと同様に、台湾の人たちもまた空襲や敵軍の上陸に脅威と不安を感じる日々を過ごしたのである。戦争を経験した世代の割合が少なくなる今、台湾の人たちの戦争経験を考える。

2014年５月６日

台湾映画鑑賞会――映画から台湾を知る②

「超級大国民（原題：超級大國民）」

担当講師　野林厚志

参 加 者　394名

内　　容　50年代の台湾。主人公はある読書会に参加したことを理由に逮捕され16年の刑を受ける。そして拷問によってリーダーの名前を漏らしてしまい、リーダーもまた逮捕され死刑となった。あがなうことのできない罪に苦しむ主人公ができるのは、亡きリーダーに謝罪の言葉を捧げることだけであった。1947年に発生した二二八事件とその後に政府が行った思想弾圧は台湾社会に暗い影を落とした。それは外省人と本省人との対立にとどまらず、隣人や友人、時には家族の絆までも奪い去ってしまった。台湾史の影を理解する。

2014年５月31日

みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞

「マイネーム・イズ・ハーン」

担当講師　三尾　稔、鈴木　紀

参 加 者　423名

内　　容　国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施している。第６期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回はインド映画「マイネーム・イズ・ハーン」を上映した。インドからアメリカに移住したアスペルガー症候群を患うイスラム教徒のインド人のリズワン・ハーンが、9.11テロ以降に顕著になった差別と偏見を乗り越えるまでの愛と勇気の旅物語を通して、異文化に生きる人びとについて皆さんとともに考えた。

2014年６月８日
台湾映画鑑賞会――映画から台湾を知る③
「童年往事 時の流れ（原題：童年往事）」
担当講師　野林厚志
参 加 者　285名
内　　容　外省人の家庭に生まれた主人公はものごころついたときは台湾にいた。大陸への帰還を切望する家族のなかで育ちながら、自分が台湾という異なるエスニシティをもつ社会の中にいる現実を感じとっていく。出身地がばらばらだった大陸からの移住者は、本省人というマジョリティに対して外省人というエスニシティを作っていった。そして、大陸で生まれ、台湾の権力主体となった第一世代とは歴史経験も価値観も異なる台湾生まれの世代が多数をしめるようになる。民主化が進むなかで変わっていく民族間関係を考える。

2014年６月14日
台湾映画鑑賞会――映画から台湾を知る④
「海角七号 君想う、国境の南（原題：海角七號）」
担当講師　野林厚志
参 加 者　321名
内　　容　抱いていた夢がかなわず、仕事にもあぶれ、都会での生活に終止符をうち故郷に帰り、祖父の郵便配達の仕事を手伝うことになった主人公。地元の寄せ集めのメンバーで作ったバンドの活動を通して、自分の大切にしてきた音楽をとりもどし、そして自分をとりもどしていく。経済成長が鈍化し現実化する台湾社会の格差問題。若者が味わっている閉塞感、世代間の価値観の違い、民族間関係、そして日本統治時代の記憶、台湾人の本音を通して今の台湾社会を感じる。

2014年７月12日
みんぱく映画会
「かぞくのくに」
担当講師　ヤン・ヨンヒ（監督）、菅瀬晶子
参 加 者　289名
内　　容　国境に隔てられた在日コリアン一家がともに過ごした、数日間の物語。在日コリアン２世の日本語教師リエには、幼いころに生き別れになった兄がいる。父の理想のため、わずか16歳で単身「あの国」に渡った兄ソンホ。そのソンホが病気治療のため、３か月の期限つきで、25年ぶりに日本に戻ってきた。息子の好物をそろえ、精一杯のもてなしをする母。多くを語らぬ父。ソンホもまた決して口数は多くなく、リエと旧友たちは気をもむ。監視役の男ヤンが常につきまとうことにも、リエは不快感をおぼえていた。病院で受けた検査の結果は思わしくなく、病は３か月では治療しきれない、深刻なものであることが判明する。そしてある日唐突に、ソンホは明日帰国するようにと命じられてしまう。リエは思いあまって、ヤンにやり場のない怒りをぶつけるが……。国境に隔てられた在日コリアン一家の数日間を描いた、『かぞくのくに』を上映し、国境や国籍のありかたや家族のかたち、日本の多文化性のゆくえ、越境が人の心にもたらす影響について、考えた。

2014年８月30日
みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞
「ヒア・アンド・ゼア」
担当講師　鈴木　紀、菅瀬晶子
参 加 者　330名
内　　容　国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施している。第６期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回はメキシコの家族を描いた「ヒア・アンド・ゼア」を上映した。アメリカでの数年間の出稼ぎ労働から故郷に帰った父親の、家族との再会と新たに築き上げていく生活模様を通して、異文化に働きに出る人々と、その人を送り出し故郷で待つ家族の心情と現況を見つめた。

2014年10月11日

みんぱく映画会【「南アフリカの過去と現在――ネルソン・マンデラから続く道」関連】

「遠い夜明け」

担当講師　池谷和信

参 加 者　201名

内　　容　南アフリカの黒人で最初の大統領として知られるネルソン・マンデラ氏は、1993年にアパルトヘイト（人種隔離）政策を廃止した。その後、人びとのくらしはどのように変わったのか？ 近年、ますます進行する国内の都市化に注目して、都市での持続可能な資源利用や生き方について考えた。

2014年11月９日

みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞

「海と大陸」

担当講師　宇田川妙子、鈴木　紀

参 加 者　223名

内　　容　国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施しています。第６期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回は、イタリア南部の小さな島の、環境が変わりゆく貧しい漁村で、法律に反すると知りながら密入国者の親子を助けた一家の苦闘を通して、現代における移民・難民の問題を考えた。

2015年２月28日

みんぱくワールドシネマ　映像に描かれる＜包摂と自律＞

「もうひとりの息子」

担当講師　菅瀬晶子、鈴木　紀

参 加 者　427名

内　　容　国立民族学博物館では、2009年秋から開始した機関研究＜包摂と自律の人間学＞のテーマにあわせて、研究者による解説付きの上映会「みんぱくワールドシネマ」を実施しています。第６期は＜多文化を生きる＞をキーワードに映画上映を展開した。今回は、湾岸戦争の混乱の中で、赤ん坊を取り違えられたことが判った、フランス系イスラエル人一家とパレスチナ人一家の動揺と葛藤のドラマを描く「もうひとりの息子」を上映した。敵対し憎悪する民族がいかに歩み寄り、理解していくことができるのかを見つめた。

博学連携

●学習キット「みんぱっく」

学校機関や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として学習キット「みんぱっく」の貸し出しを実施している。「みんぱっく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、2015年３月現在で13種類22パックを用意している。

名称	個数	2014年度貸し出し回数
極北を生きる	2	13
アンデスの玉手箱	2	22
ジャワ文化をまとう	1	11
イスラム教とアラブ世界のくらし	1	17
ブータンの学校生活	1	11
ソウルスタイル	2	24
ソウルのこども時間	2	23
インドのサリーとクルター	2	21
ブリコラージュ	3	8
アラビアンナイトの世界	2	21

アイヌ文化にであう	1	15
アイヌ文化にであう 2	1	13
モンゴル	2	32

●みんぱく春と秋の遠足・校外学習　事前見学＆ガイダンス春のガイダンス

春のガイダンス　2014年 4 月 3 日、 4 日

秋のガイダンス　2014年 8 月22日、25日

本館を利用する学校団体の引率教師を対象としたガイダンスを春と秋に実施し、春には26団体75名、秋には22団体62名、計48団体137名の学校関係者が参加した。

当ガイダンスでは、遠足や校外学習など、博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介したほか、見学に関するさまざまな相談も受けた。

●職場体験

2014年10月28日～11月19日

学校教育及び社会教育における体験活動の促進を図り、中学校等の生徒の社会性を育む観点から、中学生に「職場体験学習」の機会を提供しており、2014年度は 6 校14名の参加があった。

その他の事業

●「ミュージアムぐるっとパス・関西2014」

関西地区の美術館・博物館の宣伝・広報と新規需要の掘り起こし、関西文化の振興等を目的として、実行委員会世話人会の一員として参画した。

●展示場クイズ「みんぱ Q」

クイズ「みんぱ Q」は、展示を観覧しながら知識や興味を広げてもらおうと、クイズ形式で本館展示を楽しんでもらう企画である。本館展示の新構築に合わせ、2014年 4 月24日～ 5 月27日「中国地域の文化編」、 6 月12日～ 7 月15日「朝鮮半島の文化編」、 7 月24日～ 8 月26日「日本の文化『沖縄のくらし』『多みんぞくニホン』」を実施した。

●「音楽の祭日2014 in みんぱく」

実施日：2014年 6 月22日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、2002年から日本でも「音楽の祭日」として開催されるようになり、当館もその趣旨に賛同し音楽を愛する一般市民に広く当館を解放して開催することとなった。当日は22のグループや個人の演奏があった。

●「みんぱく×みんぱラジオ presents　角　淳一が迫る！すみからすみまで『イメージの力』」

パーソナリティーとして活躍する角　淳一さんと、アフリカの仮面、儀礼などの研究で知られる文化人類学者の吉田憲司による「イメージの力」展のトークイベントを2014年 9 月14日に実施した。

●北大阪ミュージアムメッセ

2014年11月15日、11月16日に、北大阪の 7 市 3 町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、楽器の演奏等がおこなわれた。

●連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」

特別展「イメージの力」関連イベントとして、グランフロント大阪において連続講座「みんぱく × ナレッジキャピタル――イメージの力をさぐる」を 7 回（うち 1 回は特別展ツアー）開講した。

●北海道アイヌ協会技術者研修

1990年より本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的として、公益社団法人北海道アイヌ協会が派遣した伝統工芸技術者を外来研究員として受け入れている。2014年度の受入実

績は以下のとおりである。
受入期間：2015年２月12日～２月25日
受入人数：４名

●カムイノミ
実施日：2014年11月27日㈭
カムイノミというアイヌ語は「神への祈り」という意味であり、その実施は本館が所蔵するアイヌ標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としている。従来は萱野 茂氏（故人、二風谷アイヌ資料館前館長）によって非公開でおこなわれていた。2007年度からは、ウタリ協会（現 公益社団法人北海道アイヌ協会）の会員がカムイノミと併せてアイヌ古式舞踊の演舞を公開により実施することとなり、2014年度は苫小牧アイヌ協会の協力を受けた。

ボランティア活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）」は、本館の博物館活動の企画や運営をサポートする自律的な組織として2004年９月に発足した団体である。館内で視覚障がい者への展示場案内、休日、祝日等のイベント企画、運営といった多岐に広がる活動を本館との協働で進めている。
「地球おはなし村」は、2003年に本館で開催した特別展「西アフリカおはなし村」を契機とし、2005年10月に発足した団体である。館内でアフリカの音楽活動や昔話の語り活動等に加え、近隣の児童センター、小学校及び児童福祉施設などでも広く活動をおこなっていたが、閉村が決定し、2014年11月をもって活動を終了した。

千里文化財団の事業

●国立民族学博物館友の会講演会（協力：国立民族学博物館）
◎大阪：国立民族学博物館第５セミナー室
第430回 「中国最大の少数民族、チワン（壮）族の現在」【新中国地域の文化展示関連】
2014年４月５日　講師　塚田誠之　参加人数　35名
少数民族チワン（壮）族の伝統的な住居や行事についてその変容を紹介した。また、ベトナム側の同系民族との交流やネットワークの在り方について紹介した。

第431回 「漢族はなぜ家族を大切にするのか？」【新中国地域の文化展示関連】
2014年５月３日　講師　韓　敏　参加人数　37名
家系図や位牌・婚礼に用いる物品のほか、近年の社会情勢の変化にも着目しながら、漢族の家族関係を考察した。

第432回 「多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業」【新日本の文化展示「多みんぞくニホン」関連】
2014年６月７日　講師　菅瀬晶子　参加人数　37名
日本有数の多民族の街、新大久保。その歴史的経緯をたどるとともに、ハラールフードとその産業の変容を紹介し、日本における多民族社会の在り方について考察した。

第433回 「ウチナンチューと教育」【新日本の文化展示「沖縄のくらし」関連】
2014年７月５日　講師　日髙真吾、呉屋淳子（機関研究員）　参加人数　36名
沖縄における戦後の教育事情について紹介したのち、さまざまな歴史的転換期を経験してきた同地で、教育が担ってきた役割を考察した。

第434回 「植民地期に海を渡った日本の食」【新朝鮮半島の文化展示関連】
2014年８月２日　講師　朝倉敏夫　参加人数　33名
ウドン、オムライス等、植民地期に日本から韓国に渡った食べ物の受容と変容をとおして、日本と韓国間の近現代史を考察した。

第435回　「極北の孤島グリーンランドにおける気候変動と文化の変遷」【企画展「未知なる大地――グリーンランドの自然と文化」関連】
2014年９月６日　　講師　岸上伸啓　　参加人数　45名
グリーンランドにおける人類の移動の歴史をたどるとともに、同島と地球規模の気候変動との影響関係について考察した。

第436回　「アート（美術）と人類学のあいだ――特別展『イメージの力』によせて」【特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」関連】
2014年10月４日　　講師　吉田憲司　　参加人数　43名
近年急速に距離をせばめつつあるアートと人類学。特別展「イメージの力」開催を契機に、美術館と博物館、美術史学と人類学等、アートと人類学の関係について考察した。

第437回　「ナラ林文化を再考する」
2014年12月６日　　講師　佐々木史郎　　参加人数　38名
日本文化の起源を大陸アジアに求めた「照葉樹林文化論」。これに対応するものとして、北方からの文化の流れを仮説だてた「ナラ林文化論」の課題と実証の可能性を探った。

第438回　「グローバル時代の『知的生産の技術』――フォーラム型博情館の可能性」
2015年１月10日　　講師　久保正敏　　参加人数　35名
グローバルな情報収集と利用が日常となった現代において、博物館における資料や情報の集積・利用や公開の方法について、民博の構想・展望をもとに考察した。

第439回　「都市の婚礼、山村の婚礼――ネパール社会の現在（いま）を結婚式に探る」
2015年２月７日　　講師　南 真木人　　参加人数　27名
社会の様相を如実にあらわす「結婚式」をとおして、親族やカースト・民族間の関係性、衣食住や文化継承の在り方など、地域間の違いや時代的な変容を探った。

第440回　「いま、焼畑を考える――自然破壊か、それとも共生か」
2015年３月７日　　講師　池谷和信　　参加人数　36名
世界の広範な地域で営まれてきた焼畑の事例を紹介し、焼畑をとおして人と自然との向き合い方を考えた。

◎東京：モンベル渋谷店５Ｆサロン
第109回　「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる」
2014年６月28日　　講師　小長谷有紀　　参加人数　52名
「梅棹忠夫アーカイブズ」としていち早く公開された初代館長の梅棹忠夫モンゴル調査資料について解説するとともに、前年、講師がたどった調査ルートの現状について紹介した。

第110回「多みんぞくの街・新大久保とハラールフード産業」【新日本の文化展示「多みんぞくニホン」関連】
2015年10月19日　　講師　菅瀬晶子　　参加人数　28名
日本有数の多民族の街、新大久保。その歴史的経緯をたどるとともに、ハラールフードとその産業の変容を紹介し、日本における多民族社会の在り方について考察した。

●みんぱく見学会（協力：国立民族学博物館）
第52回　中国地域の文化展示
2014年４月５日　　講師　塚田誠之　　参加人数　33名

第53回　日本の文化展示「沖縄のくらし」
2014年７月５日　　講師　日髙真吾、呉屋淳子（機関研究員）　　参加人数　33名

第54回　朝鮮半島の文化展示
2014年８月２日　　講師　朝倉敏夫　　参加人数　33名

第55回　企画展「未知なる大地――グリーンランドの自然と文化」
2014年９月６日　　講師　岸上伸啓　　参加人数　41名

第56回　特別展「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」
2014年10月４日　　講師　吉田憲司　　参加人数　41名

第57回　日本の文化展示「日々のくらし」
2015年３月７日　　講師　池谷和信　　参加人数　36名

●体験セミナー
第68回　「くすりの民族学（見学編）」
2014年４月17日～18日（奈良県）
講師　小山修三（名誉教授／千里文化財団理事長）、浅見 潤（三光クスリ資料館館長）　参加者数　22名
製薬や和漢薬の歴史と製造、くすりにまつわる神事への参加をとおして、ヒトの自然利用の在り方を考察した。

第69回「『織り』からたどる手仕事の現場（国内編）」
2014年11月20日～21日（群馬県）
講師　吉本　忍（名誉教授）、行松啓子（染色作家、群馬県立日本絹の里織物専任講師）　参加者数　14名
今なお暮らしのなかで営まれている機織りの現場を訪問し、手仕事の重要性、人と自然の向き合い方を考察した。

●民族学研修の旅
第84回　「梅棹忠夫のモンゴル調査をたどる旅――中国内モンゴルの草原と史跡をゆく」
2014年９月８日～14日（中国内モンゴル自治区）　講師　小長谷有紀　参加者数　22名
初代館長梅棹忠夫のモンゴル調査の足跡をたどるとともに、遊牧を営む人びとの生活文化について理解を深めた。

第85回　「手仕事への回帰――カンボジア、東北タイの機織りの現場をめぐる」
2015年２月１日～９日（カンボジア、タイ東北部）　講師　吉本　忍（名誉教授）　参加者数　18名
今なお暮らしのなかで営まれている機織りの現場を訪問し、手仕事の重要性、人と自然の向き合い方を考察した。

●『季刊民族学』（国立民族学博物館友の会　機関誌）
協力：国立民族学博物館
編集・発行：千里文化財団
148号：特集「復興への道３」（2014年４月25日発行）
149号：特集「女神」（2014年７月25日発行）
150号：特集「民博の礎」（2014年10月25日発行）
151号：主な記事「グリーンランド」（2015年１月25日発行）

●万博公園賑わい創出支援事業の実施
１）体験型ワークショップ「おどる！たたく！きく！――みんなであそぶアフリカの『音』」
西アフリカの伝統的な踊りと楽器演奏の鑑賞、体験ワークショップをおこなうとともに、「音」の背景にある西アフリカの生活文化について紹介した。併せて吉田憲司教授の案内のもと、特別展「イメージの力」見学会を関連企画として実施した。
会期：2014年11月８日
会場：万博記念公園、国立民族学博物館
主催：千里文化財団
助成：関西・大阪21世紀協会
協力：国立民族学博物館

参加人数：880人

2）国立民族学博物館友の会 機関誌『季刊民族学』全点展示：『季刊民族学』の軌跡

創刊150号を記念し、国立民族学博物館の研究者の協力のもと発行し続けてきた友の会機関誌『季刊民族学』を全点手にとって閲覧できるよう展示した。

会期：2014年10月２日～12月９日
会場：国立民族学博物館エントランスホール（無料ゾーン）
主催：千里文化財団
助成：関西・大阪21世紀協会
協力：国立民族学博物館
参加人数：36,500人

●みんぱくに集積された資料と情報を活用した出前授業プログラム

実施日	実施場所	プログラム内容	参加人数
2014年８月30日	久御山町立御牧小学校	ブーメラン	40名
2014年10月18日	相楽台ほっぷ広場（放課後教室）、木津川市立小学校	ブーメラン	40名
2014年10月25日	伊丹市鴻池センター婦人部	風呂敷	25名

●巡回展「マンダラ――チベット・ネパールの仏たち」の開催

会期：2014年６月28日～７月31日（34日間）
会場：高知県立歴史民俗資料館企画展示室
主催：高知県立歴史民俗資料館〈高知県文化財団〉、国立民族学博物館、千里文化財団
後援：高知県教育委員会、NHK高知放送局、高知新聞社、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、KCB高知ケーブルテレビ、エフエム高知
入場者数：総計3,146名

＜関連企画＞

１）講演会「マンダラとは何か」
日時：2014年７月５日
講師：立川武蔵（名誉教授）
会場：高知県立歴史民俗資料館
参加人数：160名

２）展示室トーク
日時：2014年７月19日
講師：曽我満子（高知県立歴史民俗資料館学芸員）
参加人数：62名

●カレッジシアター「地球探究紀行」の開催協力

会場：あべのハルカス近鉄本店ウイング館９階「SPACE 9」
主催：産経新聞社、特別協力：国立民族学博物館、千里文化財団

2014年４月９日　「演じる音――チャルメラの響きに人が集う」
講師：寺田吉孝　参加人数：33名
2014年４月16日　「インドの大地に春を呼ぶ――ホーリーの火祭り」
講師：三尾　稔　参加人数：24名
2014年４月23日　「唄をなりわいに生きる人びと――エチオピアの楽師アズマリ」
講師：川瀬　慈　参加人数：25名
2014年５月14日　「霊と交流する楽器、ゴングの今」
講師：福岡正太　参加人数：12名
2014年５月21日　「美しさをもとめて――ビーズをめぐる人類の旅」
講師：池谷和信　参加人数：14名

2014年５月28日　「美麗島の手しごと――台湾の伝統刺繍」
講師：野林厚志　参加人数：12名
2014年６月11日　「人生は音楽の調べとともに――移り変わるインドの結婚式」
講師：寺田吉孝　参加人数：14名
2014年６月18日　「南詔大理国の末裔、ペー族の結婚式」
講師：横山廣子　参加人数：10名
2014年６月25日　「家族をつなぐ 社会をつなぐ――インドの婚礼」
講師：三尾　稔　参加人数：12名
2014年７月２日　「伝説に彩られた吟遊詩人ラリベロッチ（エチオピア）」
講師：川瀬　慈　参加人数：12名
2014年７月９日　「霧の森の木彫り――マダガスカルの無形文化遺産」
講師：飯田　卓　参加人数：11名
2014年７月16日　「影が紡ぎ出す物語――カンボジア無形文化遺産の伝承」
講師：福岡正太　参加人数：13名
2014年８月６日　「島のまつりに人がつどう――鹿児島県硫黄島」
講師：福岡正太　参加人数：13名
2014年８月20日　「トンパ村――雲南シャングリラに芽生えた文化復興」
講師：横山廣子　参加人数：10名
2014年８月27日　「五年に一度、祖先に会う――台湾パイワン族の五年祭」
講師：野林厚志　参加人数：９名
2014年９月10日　「インドの女神にささげる歌と踊り」
講師：三尾　稔　参加人数：15名
2014年９月17日　「島々に響く青銅と竹の音――フィリピンの伝統音楽」
講師：寺田吉孝　参加人数：18名
2014年９月24日　「精霊と人のコミュニケーション、ザール憑依儀礼（エチオピア）」
講師：川瀬　慈　参加人数：12名
2014年10月８日　「気候変動は何をもたらしたか――世界最大の島グリーンランド」
講師：岸上伸啓　参加人数：28名
2014年10月15日　「古代マヤのことばを探る」
講師：八杉佳穂　参加人数：32名
2014年10月22日　「人間は何を食べてきたか――アフリカの食から学ぶ」
講師：池谷和信　参加人数：20名
2014年11月12日　「イスラームの世界観――アラビアンナイトから考える」
講師：西尾哲夫　参加人数：45名
2014年11月19日　「地域社会にねづくイタリアの食」
講師：宇田川妙子　参加人数：22名
2014年11月26日　「インド・サリーの世界」
講師：杉本良男　参加人数：24名
2014年12月３日　「巨大な屋根の謎――インドネシアの家屋と集落」
講師：佐藤浩司　参加人数：22名
2014年12月10日　「江戸の探検家、間宮林蔵と北方民族」
講師：佐々木史郎　参加人数：30名
2014年12月17日　「現代中国の農村のくらし――ある家族の幸せのかたち」
講師：韓　敏　参加人数：19名
2015年１月14日　「オーストラリアを旅する――カンガルーからブーメランへ」
講師：久保正敏　参加人数：29名
2015年１月21日　「南米アンデス文明の遺跡を巡る考古学者と盗掘者との闘い」
講師：関　雄二　参加人数：37名
2015年１月28日　「多民族共生を考える――ベトナム西北部の人々のくらしから」
講師：樫永真佐夫　参加人数：38名

2015年２月４日　「マレーシアの自然と生きる人びと」
講師：信田敏宏　参加人数：24名
2015年２月18日　「聖地に生きる――パレスチナとイスラエル」
講師：菅瀬晶子　参加人数：48名
2015年２月25日　「ネパールの今と昔――1982年の映像から」
講師：南 真木人　参加人数：34名
2015年３月４日　「西アフリカを掘る――発掘から見えてくる『中世』アフリカの歴史」
講師：竹沢尚一郎　参加人数：27名
2015年３月11日　「韓国の食の世界」
講師：朝倉敏夫　参加人数：40名
2015年３月18日　「日本とアイヌ民族――隣人としてくらす」
講師：齋藤玲子　参加人数：52名

番外編みんぱく見学ツアー、会場：国立民族学博物館
2014年５月９日　新中国地域の文化展示「中国ムスリム『回族』の信仰と暮らし――雲南省大理から」
講師：横山廣子　参加人数：22名
2014年７月24日　企画展「みんぱくおもちゃ博覧会」
講師：日髙真吾　参加人数：９名

●その他、普及活動
① 国立民族学博物館「イメージの力――国立民族学博物館コレクションにさぐる」オリジナルグッズの製作・頒布
② 国立民族学博物館オリジナルカレンダーの編集・発行および頒布
③『災害と文化財――ある文化財科学者の視点から』（日髙真吾著）の発行
④ リニューアルした南アジア「染織と伝統と現代」コーナーのオリジナルポストカードセットの製作・頒布